京都部落問題研究資料センター通信

第72号　発行日 2023年7月25日（年4回発行）編集・発行 京都部落問題研究資料センター

今年度も当資料センター主催の「差別の歴史を考える連続講座（全六回）」がスタートしました。今回は、第一回（六月十六日）と第二回（六月三十日）の講演の要旨を紹介します。詳しくは年度末に発行予定の講演録をご参照ください。

第一回 問い続けてなお ―満州分村移民と部落差別―

講師 エイミー・ツジモトさん（フリーランス国際ジャーナリスト）

アメリカ・ワシントン州出身日系四世のエイミー・ツジモトさんは自らの出自から「移民問題」をかねてより研究。とりわけ「差別」という視点を常に研究の中心に据えてきた。その一つの集大成として「満州分村移民と部落差別―熊本『来民開拓団』の悲劇―」（えにし書房刊 二〇二二年八月 二二〇〇円＋税）を出版。※本書については本センター通信の次号（第七三号）で紹介の予定。

熊本県の被差別部落である来民（くたみ）村の人たちは融和政策として満州に行けば差別がなくなる。分村移民として村の半分の人が満州に渡ったなら、村にはその人たちの土地が残り、その土地を来民に残った人たちが耕作することができる。そして満州に渡った人たちには「王道楽土」と謳われた満州の一〇町歩の地主になれる。自分たちが豊かになって、少しでもその財を故郷の来民に送れば、自分たちも来民もより豊かになって栄えていく。

そのような融和事業の一つの在り方を決して手放しで喜んで満州に行ったわけではないが、差別を乗り越えるという大きな覚悟と、苦しい日々を強いられている人たちを少しでも豊かにしたいという思いから一九四一年に総勢三百余人の来民村の人たちは満州に入植した。

その時の重要な条件として、満州に渡ればどのような状況があっても兵役を課さない。つまり兵隊に行かなくてもいいという約束があったのだ。来民開拓団は非常に豊かな土地を与えられて、豊かな開拓団としてどんどん発展した。

ところが戦況が著しく激化していく中で、あれだけ強く約束していた国がやむなく来民開拓団にも兵役を課すようになった。来民開拓団の頑健な若者たちは一人、二人、また一人と、兵役を課され、ほとんどの若者たちが兵隊にとられてしまった。残ったのは女性と子どもと老人ばかりだった。

一九四五年八月一五日、敗戦。来民開拓団にはその事実は知らされなかった。逆に現地の農民たちは日本の敗戦を知り、それを機に開拓団への略奪を始める。もともと日本軍に奪い取られた土地である。自分たちの土地に我が物顔で入植してきた開拓団に対する恨みは計り知れない。自分たちの土地を取り戻す、あるいはよそから来たものを追い出そうとするのは至極当然の道理である。

現地農民の暴動は次第に勢いを増し大規模に膨れ上がっていく。来民開拓団は戦いの道を選ばざるを得なかった。しかし、頼みの関東軍にも見棄てられた究極の選択が、最後まで戦い抜いて、最期は自害するというものだった。八月一七日、二七五人全員が集団自決を決行。来民開拓団の壮絶な最期を来民の人々に伝える証言者として一人だけ生還した。それが宮本貞喜だ。ツジモトさんは集団自決するに至った歴史背景から当事者の証言、資料を丹念に積み重ね、現在までを追った。手負いの宮本が簡単に生還できるはずがなく現地農民の助けがあったことも忘れてはならないという。

当日の講演は、来民の解放子供会が作成した紙芝居をもとに行われた。ツジモトさんは、開拓団も

満州民衆にとっては侵略者だったことを忘れてはならないとした上で、最大の加害者は、移民政策を推進しながら敗戦と同時に移民を見棄てた国であることを強調した。

〈来民解放子供会が作成した紙芝居〉

第二回
近江と食肉文化
講師　亀岡哲也さん
（滋賀地方自治研究センター）

下の四角囲みは、滋賀県の地域振興のためのパンフレットで、滋賀県畜産課が近江牛をプロモーションするための小冊子の一部抜粋である。いわば滋賀県の公式なものである。

亀岡さんは講演の冒頭でこのパンフレットを取り上げ、よくまとまった文章ではあるが、畜産課のオリジナルの文章ではない。吉田忠さん著『牛肉と日本人　和牛礼賛』（農山漁村文化協会　一九九二年）と瀧川昌宏さん著『近江牛（おうみうし）物語』（サンライズ出版、二〇〇四年）を参照している。また、吉田さんも瀧川さんも『彦根市史』（一九六二年）と照らし合わせていると紹介した。

日本食肉文化の原点、「近江牛」

近江と肉用牛の関係として史実に残る歴史は約400年。
日本三大和牛のひとつとして、近江牛には他のブランド牛と比べても圧倒的に長い文化があります。肉が禁食だった江戸時代、彦根藩は唯一牛肉生産が許され、味噌漬けにした牛肉を「反本丸（へんぽんがん）」という養生薬として売り出し、江戸の将軍家に献上するほどの人気を博していました。近江牛こそ日本の食肉文化の原点なのです。

〈「近江牛」に関する滋賀県の公式パンフレット一部抜粋〉

そして下線部の「味噌漬けにした牛肉を『反本丸（へんぽんがん）』という養生薬として売り出した」という一文に疑義を唱えた。

その趣旨は、吉田さんも瀧川さんも『彦根市史』も「反本丸」は味噌漬けにした牛肉であると断定はしてないのに、滋賀県の正式な出版物にこういう記述になってしまっているというものだ。

横浜開港資料館蔵
『F・ベアト幕末日本写真集』より

一方、江戸末期の相州厚木宿の写真の中に「牛肉漬」と「薬種」の看板が隣りあい、「江州彦根」の文字も読み取れることを示し、滋賀県の牛肉が遠く関東でも薬を取り扱う店で売られていた事実を指摘した。

肉食が禁忌だったとされる江戸期だが、実際には〈くすり喰ひ〉と称してかなり広く食べられていた。彦根藩では将軍家や他藩に牛肉を贈っていた史料があり、皮田村が精肉の仕事に携わっていた記録も残っている。

江戸時代において生き物が自然死であれ事故死であれ死ぬと地域によって若干の違いはあるが、大型の生き物、牛とか馬、これについては必ず皮田身分の人が処理するという決まりがあった。大きな牛、馬の命を、亡くなった後、その牛、馬から肉をとる作業をする。また肉に限らず皮、また皮以外にも骨でも尾っぽでもいろんなものを獣の体を人間の生活に役立ていくような作業をするのに皮田身分の村で処理をされることが大事なわけで、被差別部落の存在の歴史につながってくる。

彦根藩の史実からもわかるように食肉の生産は文明開化によってにわかに勃興した産業ではなく、近世後期に公然化した生業であり、中河内には最も早期に食肉生産圏が形成される。中河内という地域は更池村と向野村と富田新田であり、だいたい一九世紀のごくはじめ享和三年くらいにはもうこの地域で食肉の仕事が成立していることが資料から明らかになっている。このことからも食肉文化を支えたのは、まぎれもなく被差別民であった。

勇山の耳塚

渡辺　毅（穀雨企画室　代表）

耳塚で勇山岩次郎と遭遇した。「おお、こんなところに…」。と、初めて気づいたのはいつのころだったか。

耳塚は、現在の豊国神社から大和大路を隔ててすぐ西側にある。土台を石垣で固めた築山は芝に覆われ、てっぺんに巨大な五輪塔がある。五輪塔は江戸初期の絵図にすでに描かれているというから、洛東の風光にさらされて四百年余り、高みから四囲を見下ろしてきたことになる。

耳塚の正面から側面にかけて石柵が連なっている。神社を囲う玉垣のようなもので、石柱の一つ一つに寄進者の名が刻まれている。十一代目片岡仁左衛門、中村鴈治郎、松本幸四郎、市川段四郎…。錚々たる歌舞伎役者たち。義太夫の三代目竹本越路太夫やオッペケペー節の川上音二郎、新派の伊井蓉峰の名まである。つまり新旧の芝居連中がこぞって石柵を寄進している。寄進を呼びかけたのが、誰あろう勇山岩次郎。五輪塔の正面、鉄の扉の右側に、「伏見　勇山事小畑岩次郎」と刻まれた、やや大きめの石柱がある。おお、こんなところに。それにしても勇山は、どんな思いでこの石柵を寄進したのか。

私が勇山に興味を抱いたそもそもは、彼が明治期の京都相撲のために尽力した人物だからである。私は無類の、と自称するほどの相撲好き。相撲がらみの人物を、知らぬ存ぜぬのままにはしておけない。

勇山事、小畑岩次郎は伏見の人。宮相撲で名を上げて、侠客の仲間入り。今でいう土木建設業で財を成した。相撲興行で幾度となく勧進元を引き受け…。勇山のプロフィール紹介はいったんこの程度にしておき、その勇山が石柵を寄進した耳塚とは何ぞや、それをまずは一通りおさらいしておこうか。

耳塚は、本来は鼻塚。いつのころからか耳塚と呼ばれるようになった。晩年の豊臣秀吉が大陸への覇権拡大を妄想して朝鮮に出兵した、いわゆる文禄・慶長の役のうち、後半の慶長の役のさい、加藤清正ら諸将の率いる侵略軍は、首級の代わりに敵の耳や鼻を削ぎ取って塩漬けにして、肥前名護屋に陣取る秀吉に送り付けた。首級だと重くてかさばるが、耳鼻ならば軽くてかさばらない。これを検分すれば、海の向こうの朝鮮でどの軍勢がどれだけ戦果を挙げているかがたちどころに判るというので、秀吉は満悦至極だったらしい。もっとも耳だと、二つの耳の塩漬けがあった場合、一人の敵の両の耳なのか、二人の敵の一つずつの耳なのかが判らない。その点、鼻の塩漬けは数を勘定すれば討ち取った敵の数も知れる、というわけで、耳も幾らか混じってはいたのだろうが、朝鮮から日本へ送られる塩漬けの大半は鼻になった。戦闘員でもない一般民衆を手あたり次第に襲って、男だろうと女だろうとお構いなしに鼻を削ぎ取る蛮行も、朝鮮各地で繰り広げられたという。

耳鼻塩漬けの大樽大桶は名護屋から、凱旋さながらの仰々しさで京都まで運ばれた。それを秀吉は慶長二年九月末、洛東大仏前に埋めて盛大に「供養」する。これが、後に耳塚と呼ばれるようになる鼻塚の始まり。

と、私がくだくだ書き綴るまでもない。耳斬り鼻斬りをはじめとする侵略軍の蛮行の数々、大仏前での「供養」の仔細、さらには後に触れる豊公三百年祭の耳塚修復に関する事共に至るまで、執念く調べ尽くして一冊の本にまとめ上げた先達がいる。耳塚を知りたければ、この人のこの本を読めばいい。

琴秉洞。日朝関係史を研究してきた在日朝鮮人。書名は『耳塚～秀吉の鼻斬り・耳斬りをめぐって』。一九七八年に初版が、九四年に増補改訂版が出た。

琴さんの執念の拠りどころは、四百年前の秀吉の日本が、祖国を理不尽にも侵略し、蹂躙し、多くの無辜の民衆を殺戮したことへの怒り。さらには近代の日本が、反省も後悔もなくまたぞろ祖国を侵略し、果ては植民地支配したことへの怒り。時を隔てながらも両度の侵略行為はみごとな相似形を示し、しかも両度のいずれにおいても、侵略を美化し称賛する装置がしつらえられた。それが耳塚。

琴さんは耳塚を調べ抜く。調査は石柵寄進の発起人、勇山岩次郎にも及んでいる。だがその話はまだ早い。また後ほど。

琴さんの心は、調べれば調べるほど怒りに満たされたに違いない。秀吉が盛大に執り行ったという耳鼻の「供養」について、秀吉の取り巻き連中の一人、相国寺の承兌

はこう書き残している。太閤には耳鼻を削いで殺した朝鮮人への怨讐はなく、むしろ深い慈しみと愍（あわれ）みの心があり、五山の僧らに、敵も味方もない平等の供養を命じ、云々。承兌は「へつらったのであろう」。と琴さんは、権力者に阿諛追従する者への軽侮を込めるが、怒りは煮えたぎっていたはずである。朝鮮を侵略し、無辜の民を無慙にも殺戮しておきながら、死ねば敵も味方もなく平等、とは何事か。「供養」とは何事か。しかも承兌のへつらい文は後世、「耳塚が秀吉の慈仁心に依って築かれた」根拠として引用されることになる。

後世。明治三十一年三月。

荒んだ状態で放置されていた耳塚が、豊公三百年祭を前に、豊公つまり秀吉の偉業を顕彰する遺跡として修復され、併せてその趣意を記した耳塚修営供養碑が建立された。

碑は、耳塚の正面向かって左手に現在もある。碑文は磨耗して判読不能の箇所も少なくないが、それを琴さんは苦心して読んだ。一方、『京の石碑ものがたり』（九七年）でこの碑を採り上げた伊東宗裕さんは、建碑当時の新聞に碑文が全文掲載されていたのを見つけ出した。伊東さんがまとめた碑文の中身を辿ると、およそ以下のようになる。

「隣国と戦争するのは国威を広めようとするためで、敵国人を憎むからではない。中国では昔、楚国の人が敵の死骸を埋めて戦勝を誇る『京観（けいかん）』という塚を築こうとしたが、戦死者はみな自国のために戦ったのだからと、王は許さなかった。この王の行いは立派だと評されたが、わが国の豊太閤の慈悲心には及ばない。慶長の征韓でわが軍は連戦連勝、諸将は敵の鼻を軍功のしるしに斬り取った。太閤はこれを喜んだが、敵兵が国のために戦死したことを憐み、鼻を京都大仏前に埋め、塚を築き、卒塔婆を立て、慶長二年九月、大供養を修した。相国寺の承兌は、太閤が敵味方を差別せず慈悲を垂れたのはまことに偉大なことと称賛した。／耳塚は荒れ果て、これを憂える有志が補修・建碑をはかり、豊公三百年祭を期して供養の法会を執行した。耳塚はわが国の勢力拡張の象徴であり、豊公の徳の遺物である。朝鮮とわが国とは互いに助け合って発展していくべきで、わが国は他国に先んじて朝鮮の独立を守り、日清戦争を戦い、隣国への友誼を全うしてきた。それを昔は豊公が、交戦時でありながら実行していたのである。ここに塚を補修し建碑し、両国の友好と豊公の偉業を記念する」。

よくもまあいけしゃあしゃあと、と私でも腹が立つ。まして朝鮮人の琴さんが怒り心頭に発したであろうことは想像に難くない。碑文は耳塚が「京観」であることをのっけから否定するが、耳塚こそ、勝者が敗者の屍を積み上げて勝ちを誇る「京観」そのものではないのか。あるいは百歩譲って「京観」ではないとしたところで、他国の人びとを手あたり次第殺しておいて、供養したから「慈悲」だ「友誼」だとは、いったい何様か。

もっとも当時、つまり明治三十一年の時点で、このように憤慨した人はほとんどいなかった。いたとしても口を緘して黙さざるを得なかった。何しろ明治は、一種の「秀吉の時代」である。そのクライマックスが明治三十一年の豊公三百年祭。

徳川の治世、秀吉はタブーとされたが、それはあくまでも表向き。どこの馬の骨とも知れぬ農民が天下人に成り上がった立志伝。朝鮮出兵という海外雄飛の企て。封建・鎖国時代の日本の大衆には夢物語であり、秀吉は江戸期も十分に英雄であった。

やがて到来した明治維新。秀吉解禁。たちまちブームが到来する。歌舞伎の舞台や読物の中に躍動する秀吉。新政府もその人気をほうってはおかなかった。欧米列強と伍して引けをとらない近代国家を建設する上で、海外への権益拡張は国家的命題。目と鼻の先の朝鮮をまずは標的に、征韓論が唱えられた。もちろん、その先に広がる中国大陸が真の狙いであることは、秀吉の狙いが明国（みんこく）であったことのリフレインである。島国が壮大な版図をもつ世界屈指の大国へ発展する…という夢の実現へ向けて、秀吉は、三韓征伐の神功皇后とともに先駆者と称えられた。

しかも秀吉はただの野心家ではない。勤皇の人である。と、天皇制国家建設を進める明治新政府は強調する。文禄の役後、明国から日本の「王」と持ち上げられた秀吉は、「日本の王は天皇をおいて他におられない。なんと不敬な」と激怒した。という逸話が喧伝される。天皇の都である京都を乱世の荒廃から復興したのも秀吉。天皇を飾りものに棚上げした徳川とは異なり、天皇を輔弼して国家を統治したのも秀吉。つまり秀吉は海外進出の先駆者であると同時に勤皇の人。明治新政府にはまことに好都合な英雄であった。

そうして迎えた明治三十一年。豊公三百年祭。阿弥陀ヶ峰の豊国廟から豊国神社、大仏前に至る一帯を中心に、豊太閤の功績を称え

るイベントが繰り広げられた。当時の日本は日清戦争後の臥薪嘗胆、民衆の鬱憤がはけ口を求めていた時期である。満州朝鮮の権益をめぐる日露の確執が血の気を帯びてきた時期である。大韓帝国を進んで保護すべしとの言説がまことしやかに語られていた時期でもある。日本の大陸への野心を誰もが正当化したがっていた当時、秀吉を礼讃するイベントほど打ってつけのものはなかった。人びとは疑いもなく秀吉を敬慕し、「偉功」を称えた。

勇山岩次郎も、そうだったのか。と、ここでようやく勇山。彼も近代日本の野心に付和雷同し、海外雄飛の先駆者秀吉を称え、それで石柵を寄進したのだろうか。

＊

「ああ、明治三十一年の豊公祭か。あれはわしが死ぬる前の年のことや。覚えておる。豊国踊りゆうのんが流行って、おんな子どもが踊り狂うてな…」。

盂蘭盆。私は東山の大谷祖廟を訪ねた。万燈会を見物するつもりで石段を昇ってゆくと、探していたわけでもないのに、華の峰善吉の墓に出くわした。「おお、こんなところに」。すると幻覚かもしれないが、墓石が語りかけてきた。「あんた、京都相撲の研究のほうは進んどるんか？」。

死人の魂とは恐ろしいもので、赤の他人の私が、いずれ京都相撲の通史の一つも書いてやろうなどと目論んでいるのを、ちゃんと知っている。仕方なく、「史料が少なくて思うようには…」と言葉を濁したのだが、墓石からは「しっかりやってもらわなあかんで」の声。華の峰は明治期の京都相撲の大立者の一人で、その霊魂から叱咤激励されてしまっては否とも言えず、「勇山あたりをとっかかりに、いろいろ調べようとは思ってます、はい」。その場しのぎに口にしたつもりが、「勇山親分か。ええやないか」。

「親分はようやってくれた。明治四十二年六月の三都合併大相撲。あれは親分が松竹の大谷竹次郎に金を出させて、東京と大阪の力士連中が京都四条河原の興行にこぞって参加できるよう骨を折ったんや。知っとるか？」。

はあ。でもあれは、華の峰親方が亡くなった後のことでは？

「死んでからも京都相撲の行く末が気がかりで、あっちから見守っとったんや」。

そうでしたか。しかしあの三都合併興行は雨に祟られて、鴨川が増水して、四条河原の相撲場が流されて、えらいことだったとか。

「そや。松竹がついてるゆうても親分は大散財や。けど恨み言の一つも言わへん。あれはそういうヤツや。ええやないか、勇山をとっかかりにして京都相撲の研究」。

よろしゅう頼むで、と気配を消しそうになったので、慌てて訊ねた。「華の峰親方は豊公三百年祭を覚えておいでで？」。そこで返ってきたのが先の言葉。「覚えておる。豊国踊りゆうのんが流行って」云々。じゃあ親方は秀吉のことをどう思っていたのか。「どうって、太閤はんを嫌う人はおらんやろ。太閤はんには夢がある。朝鮮や大陸まで手に入れようやなんて、気宇壮大なこっちゃで」。

華の峰が言いそうなことである。華の峰善吉は、明治初年に京都相撲の大関を張り、後年は取締などの要職を務めた人物だが、幕末維新期には勤皇の志士とも交わり、華の峰の四股名は公卿の華頂宮から一字を授かったものだという。西郷隆盛に可愛がられ、戊辰の役では西園寺公望の軍に随行して錦の御旗を護持したとか。征韓論主唱者の恩顧を受けた上に「勤皇」が身に染みついた華の峰。秀吉の海外雄飛を称えないわけがない。

「勇山親分も、同じように思っていたんでしょうかね？」。「そりゃまあそやろ。あの時代は誰かて」。「そういう気持ちで、耳塚の石柵も寄進したんでしょうかね？」。

「それは知らん。親分が石柵を寄進したのんは、わしが死んでずいぶん経ってからや。だいたい京都相撲と関係あらへんことやし、そこまではよう見守らん。その時の親分の心境まで、わしは知らん」。

そうだった。うっかりしていた。勇山が耳塚に石柵を寄進したのは大正四年五月、豊公三百年祭から十七年も経った後である。ただし京都相撲に「関係あらへん」とまでは言い切れない。私は華の峰に、勇山が石柵だけでなく石造りの焼香台を耳塚に寄進していることを告げた。その焼香台には、東京、大阪、京都、三都の角力協会の名が寄進者として刻まれているのである。

「それは知らなんだ。大正四年ゆうたら京都相撲はほぼ消滅しとったはずやが…」。

明治の世が進むにつれ、三都相撲と並び称されていた東京大阪に、京都相撲は実力でも規模でも水を開けられた。明治三十年代ともなると、力士の総勢はやっと五十名。勇山が勧進元を務めた明治四十二年の三都合併大相撲も起死回生策とはならなかった。横綱大碇紋太郎率いる京都相撲の一行は、英国博覧会でスモウレスリングを披露すべく渡航。そのまま欧州を転々と興行し、果ては南米にまで渡り、大碇は客死する。うやむやのうちに京都相撲は事実上消滅した。名ばかりはあったにせよ、大正四年の

時点ではなかったに等しい。にもかかわらず、耳塚の焼香台には「京都角力協会」の名が刻まれている。

「親分の、京都相撲への餞(はなむけ)やな…」。華の峰の口調がしんみりしてきた。気がつけば灯ともしごろ、万燈の一つ二つに灯影が揺れている。「…寄進の金かて東京大阪は出せても京都はもう出処があらへん。自腹を切ったんやろ。そういうヤツや、勇山…」。涙ぐむような語尾を残して、華の峰の気配はふっつり消えた。蒼々と暮れてゆく空には、ねぐらへ帰る鴉の群れが旋回している…。

さてと。

勇山はどんな思いで耳塚へ石柵を寄進したのか。明治以降の新旧演劇界はいわゆる太閤物の人気で潤ってきたから、そのことを引き合いに、芝居連中には「太閤はんに恩返しせな」と持ちかけたかもしれない。すると勇山も、耳塚を秀吉の偉功の象徴と見なし、秀吉を称えるつもりで石柵を寄進したのか。

いや、ちょっと待て。

琴秉洞さんに話を戻そう。琴さんは勇山のことも調べている、と私はどこかに書いておいたはずである。琴さんは、「勇山がどのような考えで『耳塚』の石柵を建てようとしたのか、その動機がわかればこの時期の日本民衆の『耳塚』対応を把えることができる」と考えた。そこでまずは勇山が「伏見のヤクザの親分で角力を取っていた人物」、全国に義兄弟や子分が数千名いたことなどをつかみ、「男の中の男」、温和で仁義を尊び、仕事も堅実、人望が厚い、といった評判も知る。だが、なぜ勇山が耳塚石柵寄進の発起人になったのかは判然としない。信仰心が厚く、あちこちの寺社に碑や石柵や玉垣を寄進していることがヒントになるかならぬかで、「直接的動機を知るのは難しい」。

そんな中、琴さんは重要な証言を得た。耳塚に隣り合う家に暮らし、昭和五十一年に九十歳で亡くなった老人が、家人にこう語っていたというのである。「耳塚があんまり荒れているので、勇山が役者たちに呼びかけて石柵を造った」と。

この言葉に信憑性があるとするなら、勇山の思いは、存外単純なものだったかもしれない。豊公三百年祭のさいに造られた柵は木製で、十七年経って腐蝕が進んでいた。勇山はこれを見るに見かねて…。

琴秉洞さんは、勇山の石柵寄進を、「朝鮮侵略思想の延長線上でこの挙に出たのか」、「侠客としての自己の名を誇示するため」か、あるいは耳塚を荒れるがままにはしておけなかったのか、「傍証に欠けるうらみがある」と結論づける。

「供養」とは何事か、と憤ってきたが、勇山の「供養」は少なくとも、「供養」のふりして「京観」を誇る連中のものとは違うようだ。琴さんはそう感じたのだろう。

「傍証に欠ける」などと学者らしく言っているが、要するに「この人を責めるのはよそう」と決めたのではないか。

勇山の目的は、少なくとも秀吉を称揚することではなかった。と、私にも思えてくる。それが証拠に、石造りの焼香台も寄進しているではないか。東京と大阪の角力協会に呼びかけて、京都の分はたぶん自腹を切って。焼香台は、秀吉のためではない、耳鼻を斬られて埋められた死者を弔うためのものである。

芝居連中に「太閤はんに恩返しせな」くらいは言ったにせよ、要するに石柵を造るから金を出してほしくて、その口実があればよかった。あるいは明治四十二年の三都合併大相撲でつながりを深めた大谷竹次郎を通じて、松竹傘下の歌舞伎役者らに有無を言わせず寄進させたのかもしれない。

勇山が秀吉をどう思っていたか、それは分からぬ。人並みに敬慕して、十七年前の豊公三百年祭では、彼自身も浮かれて豊国踊りの一つや二つ、踊ったかもしれぬ。

だが、十七年後のこのざまだ。

大正四年。日本が朝鮮を併合した明治四十三年からすでに五年が経っていた。朝鮮侵略を正当化するため、三百年の時空を超えて光を当てられた耳塚も、朝鮮をまんまと手に入れた今となっては顧みる者とてない。そんな人の心のつれなさも、勇山の任侠道には馴染まない。耳塚が荒れ果てている。てっぺんの五輪塔が、寄る辺ない孤独を湛えて洛東の場末を見下ろしている。「このままじゃ亡者が浮かばれぬ…」。亡者は幾世隔てても、どんなお人たちであろうと、ねんごろに回向せなあかん。荒れ果てた塚を見るに見かねて、侠客勇山は起ち上がった。

＊

と、およそそんなことだったのでは？

私は勇山事小畑岩次郎に訊いてみた。晩春の曇り日。大正六年三月に死んだ勇山の墓は伏見栄春寺にある。大きな銅(あかがね)色の一枚岩。

だが墓石は、灰白色の北の空を背に、ただ立っている。私は言葉を重ねる。あなたが相撲がらみのお人ゆえ、相撲好きが、つい良いように考えがちなのかもしれないが…。

墓石は黙っている。黙ってはいるが、その時、わしは華の峰親方みたくぺらぺらお喋りはせえへんで、と任侠の人らしく鷹揚に微笑んだ。ような気がした。

◇特集 第26回全国部落史研究大会　全国水平社100周年記念事業で発行された記念誌報告
・福岡県人権研究所 松本治一郎・井元麟之研究会編『解放の父 松本治一郎への手紙　全国水平社を支えた人々との交流』 関儀久
・四国部落史研究協議会編『四国の水平運動』 山下隆章
・山口県人権啓発センター編『入門 山口の部落解放志』 高林公男
・『京都の部落解放運動史』編纂委員会編『京都の部落解放運動史―水平社創立100年』 神原弘明
・部落解放同盟東京都連合会編『東京の部落解放運動100年の歩み―全国水平社創立100周年記念』 近藤登志一
◇部落解放全国委員会「行動綱領」覚書 渡辺俊雄
◇北陸の部落解放運動の険しい道のり―山下敬太郎・部落解放同盟福井県連委員長インタビュー　戸田栄
◇和歌山県立図書館の所蔵資料の「利用制限」問題について（経過報告）　吉田勉
・資料1 私たちの見解／部落史・解放運動などにかかわる著作は「市民のための共有財産」であり、「部落解放のための共有財産」　図書館所蔵資料「利用制限」問題をめぐって　全国部落史研究会運営委員会
・資料2 和歌山県立図書館の所蔵資料の「利用制限」問題かかわる要望書 全国部落史研究会
・資料3 回答
・資料4 和歌山県立図書館利用制限資料取扱要綱
◇全国部落史研究会会員 著書・論文等目録　（2022年1月～2023年3月）
◇各地研究所（会）紀要などの紹介（2022年1月～2023年3月）

■部落問題研究 244■

（部落問題研究所刊 2023.2）1,163円
◇部落問題の解決過程における諸問題　川辺勉
◇部落問題解決の歩みと同和行政施策を否定するラムザイヤー　石倉康次
◇書評を通して考える
・「国民的歴史学運動」論の切実さとは何か？ 大串潤児
・国民的歴史学運動研究の課題と展望　『戦後日本の文化運動と歴史叙述』をめぐって　高田雅士
・国民的歴史学運動からの問いを考える　原田敬一
◇書評 鬼嶋淳著『戦後日本の地域形成と社会運動―生活・医療・政治』　荻原園子
◇部落問題文芸作品年表　大正篇　秦重雄

■水と村の歴史 信州農村開発史研究所紀要 34■

（信州農村開発史研究所刊 2021.3）
◇佐久郡南部の被差別民・佐久郡南部と被差別民1　斎藤洋一
◇史料紹介 「戊辰之記」―五郎兵衛新田村名主の慶応4年（1868）日記（完）　浅科古文書研究会
◇史料紹介 「松本一件」関係史料（補遺四）　松本人権推進古文書研究会

■むこうにみえるは ウェーブ21通信 26■

（人権ネットワーク・ウェーブ21刊 2023.3）
◇第四次産業革命と公教育～コロナ禍における教育の実際と変容について～ 4

■良き日のために 日本基督教団部落解放センター通信 29■

（日本基督教団部落解放センター刊 2023.4）
◇金城実さんの「水平社宣言」訳 鳥井新平
◇ブックレビュー　山本栄子、山本崇記『いま、部落問題を語る―新たな出会いを求めて』　片岡広明
◇同宗連研修会報告 「ウトロに生きる、ウトロで出会う」　松下道成
◇聖書と部落差別 「娘よ、という呼びかけに」 青木麻里子
◇改めて「狭山事件」とは　高橋亮也

■リベラシオン 189■

（福岡県人権研究所刊 2023.3）1,320円
◇[特集1] 鶴田知也のアイヌ表象
◇[特集2] 森崎和江・再考（3）
◇福岡豊前の水平運動・農民運動指導者　田原春次
◇松本治一郎宛書簡の検討を通して　小正路淑泰
◇[図書紹介] 朝治武・黒川みどり・内田龍史編『非部落民の部落問題』　塚本博和
◇民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 49　大江磯吉　研究の基礎史料 6　石瀧豊美
◇「住井すゑ、九五年の軌奇跡―金輪際いつぽんきりの曼殊沙―」について　中谷いずみ

◇部落解放研究第55回全国集会報告書

■部落解放 837■

（解放出版社刊 2023.4）600円＋税

◇特集 若者と一緒に部落問題を考える 東日本部落解放研究所の試み

◇本の紹介

・河村義人『事実と虚構のはざまで』 上杉聰

・孫美幸著『ともに生きやすい社会って？―わが家の「師匠」たちと学ぶ』 風巻浩

・関儀久著『感染症と部落問題―近代都市のコレラ体験』 小林丈広

・松島泰勝『学知の帝国主義―琉球人遺骨問題から考える近代日本のアジア認識』 川瀬俊治

◇偏見差別をなくしてほしい ハンセン病問題にみる人生被害 25 親の毅然とした生き方が負のイメージを超克 福岡安則

◇部落解放史の最前線 6 近世被差別身分の人びとへの差別の主体と諸形態の実際 寺木伸明

■部落解放 838■

（解放出版社刊 2023.5）600円＋税

◇[特集]いま「学級社会」をつくる意味と方法

◇[本の紹介]金子マーティン編訳『ロマ民族の口述伝承―童話・笑話・怪談・猥談・物語』友永健三

◇[語り] ふだん使っていることばで 部落・識字・女性からの人間解放1山中米子編集 菅原智恵美

◇「身分」を考える 福岡県人権研究所2020～21年度「史・資料プロジェクト」から 井上法久

◇部落解放史の最前線 7 近世被差別身分の人びとの生活実態 寺木伸明

■部落解放 839■

（解放出版社刊 2023.6）600円＋税

◇[特集]組織・運動と性暴力

◇[本の紹介]吉村智博著『近代大阪の都市周縁社会―市民・公共・差別』 井岡康時

◇[座談会]部落史のイメージを大きく変えた挑戦『シリーズ 映像でみる人権の歴史』DVD全10巻刊行！ 上杉聰、外川正明、岡本健、武田純子

◇[語り]ふだん使っていることばで部落・識字・女性からの人間解放2山中米子編集 菅原智恵美

◇部落解放史の最前線 8 近世被差別身分の人びとの闘いと解放思想の芽生え 寺木伸明

■部落解放研究 218■

（部落解放・人権研究所刊 2023.3）2,000円＋税

◇[特集]大阪における皮多村生活史研究会の研究成果

・江戸中期から後期までの河内国石川郡新堂村領冨田村の暮らし―宗門改帳・名寄帳の分析を中心として― 西岡武義

・河内国石川郡新堂村領冨田村における死牛馬取得の実態―天和三年から文久二年までの死牛馬取得記録を手掛かりに― 寺木伸明

・近世中後期における河内国石川郡新堂村内冨田村の五軒の家族ヒストリー 田村賢一

・近世真宗門徒による差別法話への抗議について―本願寺教団の対応をめぐって― 藤原有和

・河内国石川郡における心中 玉城幸男

・享保年間から安永年間の冨田村村内の状況を見る―『古書物改覚日記』・『河州石川郡新堂村枝郷冨田村出入』から― 横山芳子

・史料紹介 『弘化三年正月 大宝恵』『安永四年六月 古書物改覚日記』

◇古代における馬の革作りの復元と馬の原皮供給の考察 永瀬康博

◇高度成長期の被差別部落―「同和対策審議会調査部会総会報告書」から見えるもの― 金井宏司

◇書評 関儀久著『感染症と部落問題　近代都市とコレラ対策』 藤野豊

■部落解放研究くまもと 85■

（熊本県部落解放研究会刊 2023.3）

◇灯としての教育～自主夜間中学から公立夜間中学への歩み～ 大塚正純

◇第39回九州地区部落解放史研究集会報告

・感染症対策と被差別部落の差異化―近代福岡のコレラ体験― 関儀久

・「命令にしたがわなかった対馬の人々」の実践に関して　長瀬陽一

・対馬に招致された被差別民をめぐって―対馬藩の「穢多御取寄」　橋口和孝

■部落史研究 8■

（全国部落史研究会刊 2023.3）2,000円＋税

る地域の識字〔後編〕友永香鶴子さん（住吉輪読会・元担当者）　編集：森 実
◇[連載]企業経営の基盤に人権の尊重を　第４回　東京人権啓発企業連絡会の歩み　山岡尚哉
◇[連載]「困りごと」を抱えた人びと―鳥取県調査から見えてくるもの　第7回　谷川雅彦
◇泰司と元樹の書きたいざんまい　第20回―「特措法」が失効したから「同和地区」はなくなった？川口泰司
◇[連載]走りながら考える　北口末広　―第263回　社会に多大な影響を与えるチャットGPT3
◇人権をめぐる動き〈2023.5.11～6.10〉

■ひょうご部落解放 183■

（ひょうご部落解放・人権研究所刊2022.9）990円
◇特集 水平社一〇〇年
・私にとっての水平社宣言 水平社一〇〇年を迎えて 辻川智徳
・私にとっての水平社宣言 マイノリティを生きるすべての人へ感謝を込めて 石地かおる
・私にとっての水平社宣言 水平社100年にご縁を思う　山西康之
・水平社宣言100年の「バリバラ」 森下光泰
・兵庫の氷上における水平運動をめぐる評論の検討　朝治武
・兵庫の部落女性と水平社 宮前千雅子
・兵庫県における水平社運動の成立と展開（上）初期における兵庫県水平社運動の展開　高木伸夫
・兵庫県水平運動関係略年表
◇人権意識調査を読む１若者は、いまの社会をどのようにみているのか 石元清英
◇本の紹介
・川名はつ子監修/チャーリー・ノーマン（イラスト）『はじめまして、子どもの権利条約 改訂版』 釜口清江
・山本かほり著『在日朝鮮人を生きる〈祖国〉〈民族〉そして日本社会の眼差しの中で』李洪章
・絵 綱本武雄/文 柏山泰訓『絵本 朝鮮通信使』鄭敬珍

■ひょうご部落解放 184■

（ひょうご部落解放・人権研究所刊2023.3）990円
◇人権啓発研究第43回兵庫県集会報告書
・記念講演 外国人差別とヘイトスピーチの現場を取材して 安田浩一
・シンポジウム 水平社100年―これからともに考えたいこと 北川真児・高田大地・細田亜矢子・井上浩義

■ひょうご部落解放 185■

（ひょうご部落解放・人権研究所刊2023.3）990円
◇特集 学ぶ権利―夜間中学、識字、日本語教育
・全国識字経験交流集会報告　北川真児
・夜間中学はどこからきて、どこへ向かうのか 兵庫県を中心に　江口怜
・祝開校「姫路市立あかつき中学校」　原田貞雄
・公立夜間中学に求められているもの ―新設された公立夜間中学から見えてきたこと―　桜井克典
・インタビュー 橋渡し役として― 部落解放文学賞入選者、中村慶子（劉芳）さんに聞く 編集部
◇兵庫県における水平社運動の成立と展開(中)―中期における兵庫県水平社運動の展開―高木伸夫
◇リレーエッセイ 部落を離れて部落を思う１「部落民になったわたし」が思うこと　宮前千雅子
◇BOOKS
・呉永鎬・坪田光平編著『マイノリティ支援の葛藤 分断と抑圧の社会的構造を問う』
・朝治武・黒川みどり・内田龍史編『非部落民の部落問題』

■佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 11■

（佛教大学総合研究所刊 2023.3）
◇社会的マイノリティ集住地域における「まちづくり」の総合的研究
・「よき日のために」千本における歴史、教育、まちづくりの検証　後藤直，井川勝，島田隆之
・京都市Ｐ集落の形成と変容―高度経済成長期を中心に― 高野昭雄
・1970年までの大阪の被差別部落と朝鮮人―大阪市日之出地区解放住宅への朝鮮人入居の経緯を追って―塚崎昌之

■部落解放 836■

（解放出版社刊 2023.3）1,000円＋税

◇講演録 人の世に熱と光を―水平社創立の思想に学ぶ― 駒井忠之

■ヒューマン・アルカディア 92■

（福岡県人権啓発情報センター刊 2023.3）

◇特集 全九州水平社創立100年

・全九州水平社の歩み

・全九州水平社をめぐる主な出来事

・寄稿全九州水平社創立と水平運動の展開朝治武

■月刊 ヒューマンライツ 420■

（部落解放・人権研究所刊 2023.3）550円

◇[特集] 政治・選挙と差別・ヘイト

◇識字運動の担い手たちが語る 27 識字は楽しい。手話もある。後編 本多貞江さん（金山識字学級） 編集：森実

◇私の沖縄問題 47 「水平社宣言」を母語の琉球語で訳す―彫刻家 金城実さんの苦闘と発見の11カ月― 川瀬俊治

◇書評 中村一成著『ウトロ ここで生き、ここで死ぬ』 文公輝

■月刊 ヒューマンライツ 421■

（部落解放・人権研究所刊 2023.4）660円

◇特集 部落差別動画の完全削除にむけて

◇識字運動の担い手たちが語る 28 国際識字年の運動とムラを歩いた私の経験が重なってできた識字学級は、おばあちゃんたちの生活を変え、生きがいになった（前編） 中井栄子さん（しらさぎ識字学級） 編集：小原武次郎

◇書評 阿部藹著『沖縄と国際人権法―自己決定権をめぐる議論への一考察』 上村英明

■月刊 ヒューマンライツ 422■

（部落解放・人権研究所刊 2023.5）660円

◇識字運動の担い手たちが語る 29 国際識字年の運動とムラを歩いた私の経験が重なってできた識字学級は、おばあちゃんたちの生活を変え、生きがいになった（後編） 中井栄子さん（しらさぎ識字学級） 編集：小原武次郎

■月刊 ヒューマンライツ 423■

（部落解放・人権研究所刊 2023.6.10）660円

◇わたしの視点―メディアの現場から　第84回 北陸の部落問題　戸田 栄

◇明日をかえる法人―新たな人権への取り組み 第67回　学校現場の課題を教職員の声の力で変えていく―スクール・ボイス・プロジェクト 武田 緑

◇識字運動の担い手たちが語る 30 地域が支える地域の識字〔前編〕友永香鶴子さん　編集：森実

◇人権教育の実践の現場から（98）わたしの原点～問いから広がる学びと生き方～（前編）樋富真吾

◇貧困・子ども・人権　第46回　現在の子どもを取り巻く状況と人権（後編）豊川 まや

◇[連載] 企業経営の基盤に人権の尊重を 3「部落地名総鑑」事件の発覚とその時代　山岡尚哉

◇[連載]「困りごと」を抱えた人びと 鳥取県調査から見えてくるもの 6回　谷川雅彦

◇泰司と元樹の書きたいざんまい　第19回「差別をしない・支えない・なくす努力を学ぶ」ということ 7　松村元樹

◇[連載]走りながら考える第262回　社会に多大な影響を与えるチャットGPT 2　北口末広

◇[連載]本の道草 111「できる／できない」と体の可能性　冠野 文

◇人権をめぐる動き〈2023.4.11～5.10〉

■月刊 ヒューマンライツ 424■

（部落解放・人権研究所刊 2023.7.10）660円

◇[特集]今こそ再審法の改正へ～冤罪被害者の迅速な救済のために～　鴨志田祐美

◇[特集]狭山事件の再審、証拠開示について これまでの取り組みから見えてくること　安田 聡

◇第27回　立ち返るべきは「人権」―入管法改正案の欺瞞　佐藤 慧

◇[シリーズ　マイノリティの声]　第58回　アイヌヘイトスピーチは許さない！　多原良子

◇明日をかえる法人―新たな人権への取り組み 第68回　誰一人置き去りにしない教育を求めて～夜間中学の諸問題を考える～　一般社団法人基礎教育保障研究所　理事長　城之内庸仁

◇識字運動の担い手たちが語る 31回 地域が支え

◇全国水平社創立100周年 到達点と課題とは 4 西尾泰広

■地域と人権 1243■

（全国地域人権運動総連合刊 2023.4.15）147円

◇全国水平社創立100周年 到達点と課題とは 5 西尾泰広

■月刊地域と人権 468■

（全国地域人権運動総連合刊 2023.4）

◇全国水平社創立100周年記念中央集会の中で

■月刊地域と人権 469■

（全国地域人権運動総連合刊 2023.5）

◇全国水平社創立100周年記念レセプションの記録

◇全国水平社の歴史と創立100周年の意義　尾川昌法

◇映画『私のはなし 部落のはなし』について 植山光朗

■月刊地域と人権 470■

（全国地域人権運動総連合刊 2023.6）

◇2022年度政府要請 回答と資料 上

■地域と人権京都 880■

（京都地域人権運動連合会刊 2023.3.1）150円

◇戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革67 川部昇

■地域と人権京都 881■

（京都地域人権運動連合会刊 2023.3.15）150円

◇戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 最終回 川部昇

■地域と人権京都 882■

（京都地域人権運動連合会刊 2023.4.1）150円

◇東七條米騒動 1 木下憲二

■地域と人権京都 883■

（京都地域人権運動連合会刊 2023.4.15）150円

◇東七條米騒動 2 木下憲二

■地域と人権京都 884■

（京都地域人権運動連合会刊 2023.5.1）150円

◇東七條米騒動 3 木下憲二

■地域と人権京都 885■

（京都地域人権運動連合会刊 2023.5.15）150円

◇東七條米騒動 4 木下憲二

■地域と人権京都 886■

（京都地域人権運動連合会刊 2023.6.1）150円

◇東七條米騒動 5 木下憲二

■であい 731■

（全国人権教育研究協議会刊 2023.2）160円

◇人権文化を拓く 303 沖縄へイトと対峙する 阿部岳

■であい 732■

（全国人権教育研究協議会刊 2023.3）160円

◇人権文化を拓く 304 輝く笑顔と共に 古川沙樹

■であい 733■

（全国人権教育研究協議会刊 2023.4）160円

◇フィールドワーク 浅草・弾左衛門 レポート

◇全人教略年表

◇人権文化を拓く 305 みんなやさしかった 奈良少年刑務所の少年たち 寮美千子

■であい 734■

（全国人権教育研究協議会刊 2023.5）160円

◇全国高等学校統一応募用紙制定50年～その理念と課題に学ぶ 1～

◇人権文化を拓く 306 子どもの権利とかすかなSOSへのアンテナ 村上靖彦

■同和教育論究 44■

（同和教育振興会刊 2023.3）1,500＋税

◇今、改めて「部落差別に正面から向き合う」ということ 奥本武裕

◇史料紹介 近世真宗差別問題史料 16 「諸事取調言上帳」（その二。村井博・八木善全・八木定富担当分） 左右田昌幸

◇書評 同朋の会編『同朋教団のかなしみ「寺中」差別の現実から』 岩本智依

■奈良県立同和問題関係史料センター研究紀要 27■

（奈良県教育委員会刊 2023.3）

◇大和同志会中川義雄の活動をめぐって　深澤吉隆

◇『在方山方書出帳』から見た近世末大和国　吉野郡の一商業圏　竹中緑

◇「閨人三十六姓」と久米村の研究ノート　今西就子

◇中世大和の呪術に関する考察―番条籠名事件から　山村雅史

◇史料紹介 享保十年（一七二五）郡山今井町「町内軒役帳」 奥本武裕

◇史料紹介 龍田神社の神事・祭礼と被差別部落との関わりについて 上野充

◇八鹿高校事件から半世紀 第4章 日本教育の青春と同和教育 18 責善教育と私の高校生活 小川真奈美
◇人はみな人と接して人となる―同和教育と部落問題へのとりくみ 7 山田稔
◇和歌山県立図書館の閲覧制限問題
・和歌山県立図書館長への「申し入れ」
・和歌山県立図書館の「回答」
◇2022年度『人権と部落問題』総目次（958号～969号）

■人権と部落問題 970■

（部落問題研究所刊 2023.4）660円
◇特集 脅かされる国民のくらし
◇本棚 植山光朗著『検証 同和行政下の解放運動の光と闇―新しい「差別意識」解消のために―』 藤本修子
◇文芸の散歩道「渡辺村」にて饗応される男『翁草』より― 小原亨
◇高校教科書「日本史探究」「政治・経済」の部落問題記述の検討 大阪教育文化センター「部落問題解決と教育」研究会
◇人はみな人と接して人となる―同和教育と部落問題へのとりくみ 8 山田稔
◇八鹿高校事件から半世紀 第4章　日本教育の青春と同和教育 19 和歌山県の勤評闘争と国民の教育権 東上高志

■人権と部落問題 971■

（部落問題研究所刊 2023.5）660円
◇特集 今日の平和教育の意義
◇文芸の散歩道 嵯峨の屋主人作「庭のをしへ子」近代文学者初の部落問題文芸　秦重雄
◇八鹿高校事件から半世紀 第4章　日本教育の青春と同和教育 20 日本教育の青春と高校生活　東上高志
◇人はみな人と接して人となる　同和教育と部落問題へのとりくみ 9　山田稔

■人権と部落問題 972■

（部落問題研究所刊 2023.6）660円
◇特集 旧同和地区のまちづくりを考える
・開かれた新しい街めざし30年、北方（北九州市）はいまだ模索中 植山光朗
・旧同和地区「市営住宅団地再生計画」のあり方の検討　都市計画の見直し（案）を視野に入れて（京都市の場合）　片方信也
・広がる住民の交流と運動　京都市養正のまちづくり　清原正人
・千本北大路（京都市）のまちづくりを考える　吉田剛
・旧同和地区で進む「住戸建て替え計画」　崇仁地域と京都市の計画について　井手幸喜
◇八鹿高校事件から半世紀第4章　日本教育の青春と同和教育 21 ルポ 但馬に春が―八鹿町に町長選・町議選をたずねる―東上高志
◇本棚 尾川昌法著『新版 写真で見る水平運動史』瀧本哲哉
◇文芸の散歩道 中里介山の見事な回答―全水京都府連の質問に対して―　秦重雄
◇人はみな人と接して人となる　同和教育と部落問題へのとりくみ 10　山田稔

■振興会通信 169■

（同和教育振興会刊 2023.3）
◇同朋運動史の窓 75　左右田昌幸

■真宗 1429■

（真宗大谷派宗務所刊 2023.4）250円
◇解放の共学―「是旃陀羅」問題に聞く―「われら」の地平　井上尚実

■信州農村開発史研究所報 163■

（信州農村開発史研究所刊 2023.3）
◇「戌の満水」による浅科地区の被害 1　斎藤洋一

■月刊スティグマ 321■

（千葉県人権センター刊 2023.4） 500円
◇差別とは何か、偏見とは何か 17 千葉の部落に生きた先達の語り 2 福岡安則

■月刊スティグマ 323■

（千葉県人権センター刊 2023.6）500円
◇差別とは何か、偏見とは何か 18 千葉の部落に生きた先達の語り 3 福岡安則

■栃木県連ニュース 7■

（部落解放同盟栃木県連合会刊 2023.7.5）
◇第51回県連大会関連記事

■地域と人権 1242■

（全国地域人権運動総連合刊 2023.3.15）147円

◇関西学院における2022年度のインクルーシブ・コミュニティ実現のための取り組み：10周年を迎えた関学レインボーウィークを中心に　武田丈・澤田有希子
◇「関学ヒューマンライブラリー2022」開催報告「当事者」たちの物語を「読む」ことの楽しさと大切さ　宮崎聡子・阿部潔
◇「構造的差別」について考える～近代化過程と差別意識の形成を通して～ 日野謙一講話録5日野謙一

■関西大学人権問題研究室紀要 85■

（関西大学人権問題研究室刊 2023.3）
◇居場所の包括連携による全国モデルづくりに向けたアクションリサーチ　大阪府高槻市における市域広域事業の取り組みから　岡本工介
◇総力戦体制期の厚生事業と山口正　戦時厚生論への転回過程を中心に　吉村智博

■京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信 42■

（京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊 2023.3）
◇「やさしい日本語、やさしい声かけ」木之本マリルさんにインタビュー

■GLOBE（グローブ）113■

（世界人権問題研究センター刊 2023.4）
◇ヘイトスピーチ条例に基づく「氏名又は名称」の公表について 島村健
◇アメリカの強制収容所での日系移民調査と部落差別 廣岡浄進
◇社会調査における性別聴取の現状とこれから 釜野さおり
◇「身体」から考える人権　誌上ワークショップ 渡辺毅

■佐賀部落解放研究所紀要 40■

（佐賀部落解放研究所刊 2023.3）
◇「身分制度」「身分制社会」などと言う勿れ 江戸時代の身分と身分差別― 畑中敏之
◇人の世に熱と光を―水平社創立の思想に学ぶ 駒井忠之
◇差別発言から四年 人間に期待し、人間を信頼したい　一法師本治
◇紹介 朝治武・黒川みどり・内田龍史編『非部落民の部落問題』 田中和男

■狭山差別裁判 535■

（部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊 2022.12）300円
◇特集 袴田事件再審確定

■障害史研究 4■

（障害史研究会刊 2023.3）
◇地域と障害者 中村治
◇戦傷病者戦没者遺族等援護法と更生医療―戦後復興期の京都府を事例として― 山下麻衣
◇近世の伝聞記録「耳嚢」にみる＜障害＞―素材と論点― 高野信治
◇近代日本における「保養」概念の形成と展開 瀧澤利行
◇史料紹介 近世日本史料『続編孝義録料』にみる唖者―近世日本の農村社会に見る聾唖表象　末森明夫
◇ブックレビュー ローズマリー・マルケーイ著・鈴木光雄訳（2021）『聾唖の天才画家エル・ムード』文芸社―中近世西欧と近世日本にみる聾唖教育の類比に関する提言― 末森明夫

■人権教育研究 31■

（花園大学人権教育研究センター刊 2023.3）
◇社会福祉における部落問題の位置―1960～1970年代の社会福祉研究を中心に　梅木真寿郎

■人権と部落問題 969■

（部落問題研究所刊 2023.3）660円
◇特集 今日の部落問題をめぐる争点
・同和地区の識別情報は人権侵害か―東京地裁判決から考える― 丹羽徹
・法務省の『依命通知』における部落問題認識「同和地区」・地名問題と関わって　藤本清二郎
・「部落はどこでもない」「部落民は誰でもない」ブックレット『映画「私のはなし 部落のはなし」を観て』の中心思想　秦重雄
・「部落差別はなお根深く」存在するのか「部落差別の実態に係る調査結果」が明らかにしたこと 梅田修
◇本棚 秦重雄著『映画「私のはなし 部落のはなし」を観て―部落問題を深掘りする―』 大森実

◇[燈台] 自主夜間学校「いいあす京都」開校を祝う会
◇5/19 京都市協が合同部会
◇5/25 福知山市協が第40回定期大会

■解放新聞京都版 1259■
（解放新聞社京都支局刊 2023.7.15）
◇部落解放京都府企業連連合会第49総会

■解放新聞滋賀版 2468■
（部落解放同盟滋賀県連合会刊 2023.6.15）
◇5/20 部落解放第66回全国女性集会関連記事
◇5/12 滋賀人権啓発企業連絡会第36回総会関

■解放新聞滋賀版 2471■
（部落解放同盟滋賀県連合会刊 2023.7.15）
◇6/17第76回定期大会関連記事

■解放新聞広島県版 2454■
（解放新聞社広島支局刊 2023.3.25）
◇半世紀前 広島の部落解放運動は 1

■解放新聞広島県版 2455■
（解放新聞社広島支局刊 2023.4.5）
◇半世紀前 広島の部落解放運動は 2

■解放新聞広島県版 2456■
（解放新聞社広島支局刊 2023.4.15）
◇半世紀前 広島の部落解放運動は 3

■解放新聞広島県版 2457■
（解放新聞社広島支局刊 2023.4.25）
◇半世紀前 広島の部落解放運動は 4

■解放新聞広島県版 2458■
（解放新聞社広島支局刊 2023.5.5）
◇半世紀前 広島の部落解放運動は 5

■解放新聞広島県版 2459■
（解放新聞社広島支局刊 2023.5.15）
◇半世紀前 広島の部落解放運動は 6

■解放新聞広島県版 2460■
（解放新聞社広島支局刊 2023.5.25）
◇半世紀前 広島の部落解放運動は 7

■解放新聞広島県版 2461■
（解放新聞社広島支局刊 2023.6.5）
◇半世紀前 広島の部落解放運動は 8

■解放新聞広島県版 2464■
（解放新聞社広島支局刊 2023.7.5）
◇6/4 2023部落解放・人権啓発講座関連記事

■かけはし 5■
（香川県隣保館連絡協議会刊 2023.3）
◇香川隣保ソーシャルワーカーは、かくして生まれた4

■語る･かたる･トーク 336■
（横浜国際人権センター刊 2023.2）550円
◇語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う「信じる」でなく「信じ抜く」 吉成タダシ
◇部落史 学び直し 問い直しのススメ 23 中世の文化と差別された人々 3 ケガレとキヨメ 外川正明

■語る･かたる･トーク 337■
（横浜国際人権センター刊 2023.3）550円
◇語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 伝えたい「が」 吉成タダシ
◇部落史 学び直し 問い直しのススメ 24 中世の文化と差別された人々 4 洛外に暮らした河原者たち　外川正明

■語る･かたる･トーク 338■
（横浜国際人権センター刊 2023.4）550円
◇語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 賞味期限：なし 吉成タダシ
◇部落史 学び直し 問い直しのススメ 25 中世の文化と差別された人々 5 仏教、神道とケガレ　外川正明

■語る･かたる･トーク 339■
（横浜国際人権センター刊 2023.5）550円
◇語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 人権学習は、希望 吉成タダシ
◇部落史 学び直し 問い直しのススメ 26 中世の文化と差別された人々 6 造園のデザイナー山水河原者 外川正明

■関西学院大学人権研究 27■
（関西学院大学人権教育研究室刊 2023.3）
◇外国にルーツのある学生の就職活動における人権課題：WEBアンケート調査・聞き取り調査結果からの大学への提言 辻本久夫・原弘輝・岩坂二規・高吉美・澤田有希子・高島千代・中川慎二・山本紀子・吉野太郎・武田丈
◇学校プリントの日本語レベル測定の試み　散在地域の外国人保護者が直面する読みの課題　荻田朋子
◇難民問題への本学の取り組み―2022年度　打樋啓史

◇史料紹介 『横濱繁昌記』より「半面の横濱 3 乞食谷戸」 鳥山洋
◇八代目弾左衛門（要人）の仕置きと代替わりに関連した在方の動き　「くりから薬師」建立一件・顛末　松本勝
◇史料紹介 草津湯宿逃去り一件 鳥山洋

■解放新聞 3057■

（解放新聞社刊 2023.3.5）115円
◇炎上するヨーロッパ　暴力にさらされるロマ 金子マーティン（寄稿）
◇まなぶ つながる うごきだす 識字のいま 3 菅原智恵美

■解放新聞 3058■

（解放新聞社刊 2023.3.15）115円
◇本の紹介 河内水平社創立100周年記念事業実行委員会編『あゆんだみち』 歯朶山加代

■解放新聞 3059■

（解放新聞社刊 2023.3.25）115円
◇「熱と光」にみちびかれて 部落解放への教育3 森実

■解放新聞 3060■

（解放新聞社刊 2023.4.5）115円
◇まなぶ つながる うごきだす 識字のいま 4 菅原智恵美
◇本の紹介 部落解放同盟大阪府連合会編『大阪の部落解放運動 100年の歴史と展望』吉田勉

■解放新聞 3061■

（解放新聞社刊 2023.4.15）115円
◇本の紹介 黒坂愛衣・福岡安則著『ハンセン病家族訴訟 裁きへの社会学的関与』 日野範之
◇まなぶ つながる うごきだす 識字のいま 5 菅原智恵美

■解放新聞 3062■

（解放新聞社刊 2023.4.25）115円
◇資料を大阪公立大へ リバティが報告集会
◇投稿 部落差別の責任は国家にあり　現在に続く一方的独善性1 川元祥一
◇「熱と光」にみちびかれて 部落解放への教育4 森実

■解放新聞 3063■

（解放新聞社刊 2023.5.5）115円
◇リバティおおさか 大阪公立大学への人権資料の寄贈と今後の方向
◇本の紹介 部落解放同盟群馬県連合会刊『群馬の部落解放運動史 1923―2023 群馬県水平社創立100年』 朝治武
◇投稿 部落差別の責任は国家にあり　現在に続く一方的独善性2 川元祥一

■解放新聞 3064■

（解放新聞社刊 2023.5.15）115円
◇まなぶ つながる うごきだす 識字のいま 6 菅原智恵美
◇『被差別部落に生まれて　石川一雄が語る狭山事件』 著者・黒川みどりさんに聞く
◇投稿 部落差別の責任は国家にあり　現在に続く一方的独善性 3 川元祥一

■解放新聞 3065■

（解放新聞社刊 2023.5.25）115円
◇水平社創立100周年記念事業で韓国を訪問　朝治武
◇本の紹介 斎藤幸平著『ぼくはウーバーで捻挫し、山でシカと闘い、水俣で泣いた』 谷元昭信
◇「熱と光」にみちびかれて 部落解放への教育5 森実

■解放新聞 3066■

（解放新聞社刊 2023.6.5）115円
◇まなぶ つながる うごきだす 識字のいま 7 菅原智恵美

■解放新聞大阪版 2316■

（解放新聞社大阪支局刊 2023.6.15）
◇「全国部落調査」6月28日に判決
◇[主張] 差別につながる「裏アカ調査」　問われる公正採用選考のあり方

■解放新聞大阪版 2319■

（解放新聞社大阪支局刊 2023.7.15）
◇全国部落調査訴訟判決関連記事

■解放新聞京都版 1257■

（解放新聞社京都支局刊 2023.6.15）
◇京都府連に脅迫メッセージ届く「ヘイトクライムは許さない」
◇5/23 狭山事件の再審を求める市民集会(東京・日比谷)関連記事
◇第72期京都人権文化講座「沈黙からの目覚め」藤尾まさよさん講演

収集逐次刊行物目次 （2023年4月～6月受入）

―各逐次刊行物の目次の中から部落問題に関係のあるものを中心にピックアップしました―

■アイユ 382■

（人権教育啓発推進センター刊 2023.3）225円

◇インタビュー 今なお残る差別―この映画を見て感じて考えてもらいたい 満若勇咲さん

■アイユ 386■

（人権教育啓発推進センター刊 2023.7）225円

◇インタビュー 人として、アイヌとして人の痛みを知り、共に生きる 宇梶剛士さん

■IMADR通信 213■

（反差別国際運動刊 2023.2）

◇特集 自由権審査が示すもの　SOGI・難民・在日コリアン

◇不可視化に抗するために　100年前の部落女性は何を伝えようとしたか3 宮前千雅子

■IMADR通信 214■

（反差別国際運動刊 2023.5）

◇特集 子どもの権利を守るために

■ウィングス京都 175■

（京都市男女共同参画推進協会刊 2023.4）

◇図書情報室新刊案内

・鷲谷花著『姫とホモソーシャル 半信半疑のフェミニズム映画批評』

・堺正一著『荻野吟子とジェンダー平等』

■ウィングス京都 176■

（京都市男女共同参画推進協会刊 2023.6）

◇図書情報室新刊案内

・猪谷千香著『ギャラリーストーカ―美術業界を蝕む女性差別と性被害』

・三浦まり著『さらば、男性政治』

■解放共闘大阪 1157■

（部落解放大阪府民共闘会議刊 2023.6.15）

◇5/24 狭山事件現地調査関連記事

◇5/22 部落解放・人権政策確立要求第一次中央集会

■解放共闘大阪 1159■

（部落解放大阪府民共闘会議刊 2023.7.15）

◇全国部落調査裁判　東京高裁で勝訴判決

◇関東大震災から100年

■解放研究 33■

（東日本部落解放研究所刊 2023.3）2,000円＋税

◇大正知識人の指導者意識と部落解放思想　全国水平社創立期における三浦参玄洞・佐野学佐々木政文

◇長野県同和教育副教材『あけぼの』の改訂について―大鹿中学校の学びとともに・『私たちは誹謗中傷をしません』宣言への道のり　永池隆

◇横浜の都市下層の歴史から考える　「乞食谷戸」と呼ばれた地域の歴史を通じて　藤原望

事務局より

◇10月より「差別の歴史を考える連続講座（後半）」が始まります。どうぞご参加ください。

第4回 10月13日(金)「幕末京都の非人小屋「水車」の人々」　講師：小林ひろみさん

第5回 10月27日(金)「日本の識字問題から「人権」について考える」　講師：棚田洋平さん

第6回 11月10日(金)「近世政治起源説はなぜ一世を風靡したのか」　講師：佐々木政文さん

《時間》各回とも午後6：30～午後8：30　《会場》京都府部落解放センター　4階ホール

□所在地　〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階
□TEL/FAX 075-415-1032　□E-mail qm8m-ndmt@asahi-net.or.jp
□URL http://shiryo.suishinkyoukai.jp
□開室時間　月曜日～水曜日・金曜日・第2・第4土曜日10時~17時（祝日・年末年始は休みます）
□交通機関　市営地下鉄烏丸線「鞍馬口駅」（京都駅より約10分）下車　北へ徒歩5分